

二〇二〇年度 入学試験問題

法学部 A 方式 II 日程・国際文化学部 A 方式・キャリアデザイン学部 A 方式

二 限 国 語 (60 分)

〈注意事項〉

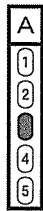
- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

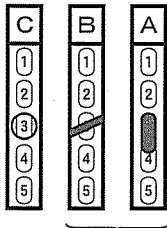
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答は HB の黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を 3 にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章は『流言のメディア史』という書物の結論に近い部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

1
メディア流言はなくなることはないだろう。それは社会変動にもなう揺らぎの中で人々がストレスと不安の解消を求めて行うコミュニケーションのシヨサン^Aであり、現代社会、すなわちメディア社会の構成要素の一部だからである。一方で、学問としてのマス・コミュニケーション研究は、総力戦体制期に「正しい情報を効果的に伝えるプロパガンダ研究」として成立した。その正しい情報は送り手側の主観において「正しい」のであって、プロパガンダの内容の真偽はその効果の大小ほどには重視されていなかった。「マス・コミュニケーション」という新造語も「プロパガンダ」の代用語として第二次大戦中のアメリカで使われ始めた。

戦時デマの予防と抑制を目的とした流言の古典的研究——たとえば、G・W・オルポート&L・ポストマン『デマの心理学』は「真珠湾デマ」とアメリカ国民の戦意分析から始まる——も、効率と精度を追求する総力戦体制の遺産であり、「正しい情報」がコミュニケーション過程で歪められる諸要因の解明が目指されていた。それは「情報の崩壊モデル」と呼ぶことができる。今日の「ポスト真実」論も、このモデルの上で語られることが多い。正しい「真実」がまず起点としてあり、メディアに歪曲された真実、すなわち「ポスト真実」に変化する、そうした情報の劣化イメージである。

しかし、メディア研究の出発点にあったのは、I。その事実をまずは正しく認識することが必要である。私たちが友人と日常行うコミュニケーションにおいて、最優先するのが親密な心地よさ(効果)なのかメッセージの整合性(正しさ)なのか、と自問してみるとよいだろう。その上で、流言に「あいまいな状況にともに巻き込まれた人々が自分たちの知識を寄せあつめること」によって、その状況について有為な解釈を行おうとするコミュニケーション^{*}の定義を採用したい。この定義から見えてくるメディア流言とは、送り手にとっても受け手にとっても「情報崩壊」ではなく、「情報」X「なのである。

SNSの普及は、かつては情報の受け手にすぎなかったすべての人々が情報の送り手となることを可能にした。それはメデ

イア流言の「情報

X

「モデルにおいて誰もが自己メディア化する社会の成立を意味する。だが、それが新しい変化とは言えないことを本書はメディア史から明らかにしてきた。「最も古いメディア」うわさの伝播プロセスにおいて、私たちはただの受け手ではありえず、目的に応じてうわさの内容を取捨選択し、自分がより説得的だと思っ情報をつけ加える。こうした伝播プロセスを考えるなら、うわさについて語った者はすべて情報の送り手となる。たとえ無自覚であれ自主的に伝達に参加する「くちコミ」は、バイラル(感染)メディアであるSNSの参加員システムのとよく似ている。つまり、「ポスト真実の時代」で問われているのは、受け手⇨送り手になったメディア流言と向き合う私たち自身の姿勢なのである。

つまり、今日のメディア流言は受け手⇨送り手の説得コミュニケーションである。誰であれ流言をツイートするとき(あるいはリツイートするとき)、無意識のうちにも相手の反応をモニターし、情報をコントロールしている。こうしたコミュニケーションにおいて、客観的な立場でその内容を冷静に分析することは、口で言うほど簡単なことではない。かつてイギリスの新聞王ノースクリフ卿はこう語った。「ニュースとは、だれかがどこかで抑圧しようと望んでいる事柄である。それ以外はすべて広告だ」。私たち一人ひとりがジャーナリスト、すなわち広告人なのである。

(中略)

誤情報はすべて排除して正しい情報のみを残すべきだ、そうした主張はなるほど正論である。しかし、この正論は歴史上しばしば「表現の自由」を抑圧する権力側の口実として利用されてきた。そして公共メディアで「正しい情報」のみが伝えられた全体主義国家、たとえばナチ第三帝国であれ、ソビエト連邦であれ、それは流言にあふれた社会であつた。しかし、AI時代の全体主義国家であれば、オルタナティブ・ファクト(代替的事実)である流言をメディアから完全に排除する「クリーンな情報社会」を実現できるかもしれない。

さらに、より根源的な問いに目を向けたい。そもそも客観的で信頼できるAI制御の情報空間で、人間は本当に幸せに暮らせるのだろうか。たとえば、そうした情報システムが進路選択に採用されたとする。いや仮定の話ではなく、すでに一部の企業はAI技術を入社選抜や人事評価に導入している。依怙^{えこひさま}眞^{まこと}員^{いん}のある主観的な選抜・評価よりも客観的で信頼できるものを望

む声に反論することはむずかしい。それゆえ、選抜・評価へのAI技術の導入は避けがたいはずだ。たとえば、AIがあらゆる受験生の個人情報^{*}をビッグデータに照らして客観的に判断すれば、一発勝負の試験だけではなく普段の学習態度まで^Bカミした、誰も不満を口にできないほど正確な客観的評価をくだすことも可能だろう。

だが、まさに「誰も不満を口にできない」評価の存在こそが問題なのである。こうした「真実の評価」で選ばれなかった者の身になって、それが自己肯定感に与えるダメージの大きさを考えてみればよい。現行レベルの、つまり改善の余地がある選抜システムであればこそ、言い訳はいくらでも可能なのだ。客観性を極度に追求した人物評価システムで「ダメだし」を受けた場合、そのダメージは決定的である。エリート^C(センリョウ)だけが自己肯定感を満喫できる社会が望ましい社会とはとても思えない。だとすれば、客観性と正確性を追求するAIの世界において、私たち人間の最後の拠り所が「あいまいさ」なのではなからうか。そう考えるなら、あいまい情報であるメディア流言も単純に否定すべきものではなく、私たちは「流言がある世界」をまず現実として受け入れる必要があるはずだ。そもそも、日常生活における私たちの行動はほとんど身の回りで耳にするあいまい情報に基づいて決定されている。しかし、それで生活に不都合をきたすことは少ない。私たちの自由はそうした不確実な情報環境の上に成り立っている。さらに言えば、あいまい情報によって人間は新しい情報環境に適応する能力を日々鍛えられているのである。

流言、デマ、風評、誤報なども、その分析を通じて社会の感情や欲望、すなわち世論への洞察に導いてくれる貴重なデータである。世論(大衆感情)より輿論(公的意見)を尊重するべきだという私の規範意識は変わらないが、これからの時代において世論をますます注視する必要があることは確かである。そのためにも、「国民感情調査」である世論調査はますます有効に活用すべきだろう。

ただし、AI時代においては、わずらわしいアンケート調査に回答しなくても、ビッグデータで代用できるものが多い。また、情報が少なければ、私たちは情報の欠落部分を何とか解釈で埋め合わせようとしてきたが、AI駆動で情報の欠落がまれになる「真実の時代」に、私たちは思考力を働かせようとするだろうか。むしろAIが示してくれる合理的な解釈に判断をゆた

ねるのではあるまいか。そのほうが安楽だからである。その結果、こうした情報空間で人間に求められるのは理性的な思考より感情的な決断だけとなる。すでに二〇世紀の「輿論の世論化」において始まった、情報社会から情動社会への変化はいっそう加速するはずだ。

(中略)

SNS上のフェイクニュースも、メディア流言と同様に、その内容の大半は犯罪・災害・戦争など恐怖やゾウオの感情を呼び起こす否定的な事象であり、特にマイノリティーや外敵に関する差別表現が多い。それは人間という生き物の暗部を理解するためには必要なデータである。ヘイト情報として取り締まるべき対象であったとしても、それは私たち自身が真摯に向き合う課題である。しかし、そうしたヘイト情報に向き合うこと、ましてその規制にたずさわることが、誰にとっても決して気持ちのよい仕事ではない。そのわずらわしさから、ヘイト情報の削除をAIにゆだねたいと考えるのは人間として自然なことなのだ。

この点こそ、未来の深刻な問題だと私は考えている。私自身をふくめ、多くの人は快適さを求めてわずらわしい判断をAIにゆだね、その動きに適応してゆくはずだ。AIの動きを予測して動くことは、機能的に見れば、AIに命令されているのと変わらない。AIが人間化するより、人間がAI化する可能性が高いのである。そしてAIはあいまい情報を苦手とするため、AI化した人間があいまい情報の自動的なクレンジングを要求するという事態は十分に予想できる。

そうした「真実の時代」はジャーナリズムにとっても不幸な時代となるだろう。あいまい情報の世界においてこそ、信頼できる情報を伝えるメディアは高く評価されてきたからである。だとすれば、「ポスト真実の時代」と呼ばれる現代こそ、出版、新聞、放送など既存メディアがその人間的な真価を發揮する好機なのかもしれない。もちろん、私たちもメディア流言があふれていることをデフォルトとして*とめた上で、信頼できるメディアを自ら育てていく覚悟が必要とされている。

マスメディアの責任をただ追及していればよかった安楽な「読み」の時代はすでに終わり、一人ひとりが情報発信の責任を引き受ける「読み書き」の時代となっている。こうした現代のメディア・リテラシーの本質とは、あいまい情報に耐える力である。

この情報は間違っているかもしれないというあいまいな状況で思考を停止せず、それに耐えて最善を尽くすことは人間にしかできないことだからである。

(佐藤卓己『流言のメディア史』より。文章を一部省略した)

【注】 *プロパガンダ 特定の思想・主義の宣伝。

*定義 タモツ・シブタニ著、広井脩・橋元良明・後藤将之訳『流言と社会』(東京創元社、一九八五年)という書物による。

*AI 人工知能。

*ビッグデータ 情報通信技術の発達によって蓄積されるようになった、さまざまな種類・形式でさかんに更新される巨大なデータ。

*デフォルト 標準設定、初期設定。

問一 傍線部1「メディア流言」の発生について筆者はどのように考えているか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア SNSが発達して初めてメディア流言が生まれ、人々は情報を受け取るのみならず情報を送る側に立つことも可能となった。

イ 初めは正しい真実であった情報が、マスメディアによる報道を通じて次第に劣化していき、メディア流言となる。

ウ AI時代の全体主義国家は、ナチ第三帝国やソビエト連邦にもまして、メディア流言が発生しやすい社会となる。

エ 人々がストレスや不安を抱えやすい現代社会において、コミュニケーションの潤滑油としてメディア流言が発生する。

オ 人々が自らを取り巻く状況を解釈するべく自分たちの知識を寄せあつめる行為が、メディア流言を生む。

問二 空欄 I にあてはまる表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 効果的なメッセージ伝達であって正しいメッセージ内容ではない
- イ 現実的なメッセージ伝達であってあいまいなメッセージ内容ではない
- ウ 整合性のあるメッセージ伝達であって効果的なメッセージ内容ではない
- エ 最新のメッセージ内容であって正確なメッセージ伝達ではない
- オ 具体的なメッセージ内容であって迅速なメッセージ伝達ではない

問三 空欄 X にあてはまる言葉として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 歪曲
- イ 伝達
- ウ 構築
- エ 拡散
- オ 統制

問四 AIについて述べた文として、筆者の考えに合致するものをつぎの中から二つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア AI技術を入社選抜や人事評価に導入し、客観性を追求した人物評価システムを運用すべきである。
- イ ヘイト情報は人間の暗部を理解するために必要であり、情報の選別をAI任せにせず私たちがそれに真摯に向き合うべきである。
- ウ AI時代を迎えると、人間は必要な情報が欠落している部分を解釈で埋め合わせようとするようになる。
- エ AI化した人間があいまい情報の削除を求めるような「真実の時代」においてこそ、メディアは重要な役割を担う。
- オ AI時代には、人間はAIの合理的解釈に判断をゆだね、感情的判断だけが求められることとなる。

問五 筆者はメディア流言を含む「あいまい情報」の意義はどのような点にあると考えているか。本文全体の内容をふまえて、つぎの形式にしたがつて、四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

あいまい情報が、

点。

問六 本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 友人とのコミュニケーションで親密な心地よさとメッセージの整合性のどちらを優先するか自問してみることが、誤情報を排除する助けになる。

イ 人々はメディア流言を自ら発信するとき、意識して客観的にその内容を分析し、情報をコントロールするべきである。ウ 流言や誤報などを検討することによって、私たちは世論よりも輿論について考察することができる。

エ 客観的で信頼できるA Iが情報を制御するようになると、エリートだけが自己肯定感を満喫できる社会になっていきかねない。

オ 誤った情報をできる限り排除したクリーンな情報社会の下でこそ、人々は正確な客観的評価を受け、幸せに暮らすことができる。

問七 波線部A～Dのカタカナを漢字に直して解答欄に記せ。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

死者は時間とどのようにかかわるのであろうか。死者はすでに死んだものとして、過去にかかわることは明らかである。しかし、死者が力を及ぼすのはまさしく今現在であり、その点では過去に封じ込めることはできない。

もつともこのように考えるのは、きわめて常識的に、時間の流れを前提として、その中に死者が位置づけられると考えたからであるが、死者はそのように、既成の枠の中に収められるものであろうか。共同体の循環的時間の中では、一人の一生は繰り返される多数の人たちの一生の一コマであり、特権性をもたない。その意味で、人の死もまた繰り返し現れる現象であり、^{1A}循環の中に位置づけられる。死者儀礼が形成されるのも、このような繰り返しがあるから可能となる。

しかし、実際には私たちにとって、死者は繰り返し返される循環の中に簡単に還元することができない。身近な他者の死は取り返しのつかない一回的な出来事であり、循環する多数の死者の中にカウントして済ますことはできない。スムーズに時間の流れの中に位置づけて、過ぎ去らせてしまうことができない。死者は時間を止めてしまう。^{1B}死者は循環もせず、進行もせず、時間の中に回収しきれない。死者は時間に突き刺さった異物である。

もう一つ重要なことは、死者の扱い難さである。死者は呼べど応えず、死後の遺体は腐敗し、異臭を放ち、もて扱いに困る厄介なものに変ずる。もはや現世の人の手に負えない。人の死は経験され、循環的時間の中に位置づけうるが、死後どうなるかについては、直接経験できないので、そこには得体のしれなさがつきまとい、通常の循環の中に位置づけようがない。放っておけば、生者に危害を及ぼす危険な何者かだ。そこで、死者を慰める儀礼が必要となり、死後を説明しようとして、さまざまな死後の世界に関する理論が構築される。だが、どのような理論でも合理化しきれない違和感をぬぐえない。生者の世界における循環は、そのままでは死者の世界には通じない。

このように、取り返しのつかなさ、得体のしれなさ、死者のもつとも基本的なあり方である。この二つの特性は、死者を生者から断絶させる。死者が他者であり、「冥^{カキ}」の世界に属するのは、このためである。生者は、たとえどのように他者性

を持ち、理解不可能と言っても、それでもコミュニケーションを行い、相互理解に達しうる可能性を持っている。しかし、死者はもはやその可能性を持たない。死者は「頭」*の領域に取り戻すことができない。

そこで、もう一度死者の時間性を考えてみよう。²死者はその根源において過去性によって刻印されている。現に今、死者が生者とかわりを持ち、生者を脅かすとしても、それは死者との過去のかかわりがあって初めて生ずるものであり、過去の現在への闖入^{つたひよう}である。現在の中に過去が入り込み、現在が過去化する。死者はスムーズな時間の流れを止めるばかりか、その流れを混乱させ、逆転させ、重層化させる。もはや時間は、過去・現在・未来と単調に流れてくれない。死者は過去のでありながら、本当のところは過去という規定でも捉えきれない。死者は平板な時間の中には位置づけられない。むしろ過去・現在・未来という常識的な時間を完全に覆して、破壊する。

それでは、死者の過去性とは何なのか。死者が過去という規定で捉えきれないとしたら、どのように考えたらよいのか。ここで私たちは根底から発想を逆転しなければならなくなる。過去の中に死者がいるのではなく、死者が本当の意味での過去を作り出すのではないか。この言い方は、いささか奇妙に聞こえるかもしれない。もう少し説明すると、過去・現在・未来という時間の流れがまずあって、その中で過去に死者が位置づけられるのではなく、むしろそのような流れがあるということではじつは前提とはならず、死者によって初めて動かし得ない過去に直面することになるのではないか、ということである。

死者がいなければ、時間の循環は、たとえそこに多少のずれが生じたとしても、修復可能で持続しうる。今日は昨日と少し違いかもされないが、多少修正すれば、ほぼ昨日と同じことが通用する。明日も同様であろう。だが、死者は修復を不可能とする。死者は取り戻せない。死者は循環を断ち切り、時間を成り立たなくさせる。死者は時間に打ち込まれた X であり、過ぎ去ることがない。もはや昨日と同じ今日はない。

³逆説的だが、過去は時間の流れの中にあるのではなく、循環が止まり、時間を失うことなのだ。過去は死者によって生まれる。それゆえ、過去と現在と未来が、同質的に並列するということはあり得ない。過去がまずあり、過去が優先する。

それでも、流れない時間が流れる。死者は少しずつ変貌し、時間は停滞しながら、動き出す。循環は回復されるが、もはや

以前の循環ではない。死者は戻らない。新しい循環は過去の循環ではない。そこに時間の断絶があり、時間は不可逆的となる。もつとも、死者による断絶とは言つても、そこに瞬間的な断絶があるわけではない。死者は緩慢に変化する。生者は連続的に死者に移行していく。脳死は死かという議論は、医学的、法律的にはあり得ても、本来的には無意味な議論であり、死はある幅をもって訪れる。そして、死者となつてからも次第に変貌する。身体を持った死者(遺体)は、やがて火葬、埋葬を経て、身体なき死者となり、アラタマの状態から、ニギタマの状態に変化し、次第に遠ざかる。

その中で、生者の死者に対する関係もさまざまな形をとる。不慮の死者は生者を責め、生者は死者に負い目を負つて苦しむ。死者は生者に災いをもたらすこともあるかもしれない。それがアラタマの状態であり、歴史的には御霊神ごりょうじんのような形態である。生者は死者の告発に身を曝さらさなければならぬ。上原専祿が激烈に指摘したように、死者は生者を裁き、生者に共闘を呼びかける。災害の死者、戦争の死者は、時を経てもその力を弱めることなく、生者を安穩に眠らせない。

他方で、死者はニギタマ的に生者に恩恵を与える面をも持つようになる。死者は生者を包み、生者を励まし、生者を助ける。こうして、死者は神仏に近づく。死者は菩薩ぼつさつとして、生者を導きながら、生者もまた菩薩たることを求める。そこに田辺元もとの言う死者との実存協同が成り立つ。

死者も時間の中で変わつてゆく。だからと言つて死者がいなくなるわけではない。かつて盛んに言われた「歴史の記憶」論争では、死者を直接知っている世代がいなくなり、死者の記憶がなくなれば、死者の問題はなくなつてしまふかのようである。いまや戦争の死者、原爆の死者たちを直接知る者が少なくなり、記憶の消滅が深刻な問題となつてきた。だが、それによつて死者はいなくなるのであろうか。そうではない。死者は姿を変えてゆくのだ。その生々しさが薄れたとしても、死者は別の形で生者とかわり続ける。それゆえ、死者の変容にあわせて、生者の側も態度を変えていかなければならない。そうでないと、死者の発するメッセージを正しく受け止めることができない。

死者はもちろん多数であり、次々に堆積していく。こうして過去は重層化して、それが歴史を形作ることになる。死者が次第に遠ざかる中で、記憶・想起から記録・痕跡がよりどころとされる。歴史は、捉え直された過去であり、そこでは自己との

距離が前提とされる。書かれたものを読むことは、語りを聞く同時性と異なり、そこにはタイムラグが生ずる。過去に書かれたものを、現在において読むのであり、過去に対して現在が対置される。現在は過去と異なる時間でありながら、読む行為の中で過去が呼び出され、現在に過去が重なる。

過去・現在・未来が同質的でなく、過去が優越し、過去と対比するところに現在が生まれるとしたら、未来はどうなるのか。時間が安定的に循環している限り、未来はある揺れの範囲で過去の繰り返しであり、異なる未来への不安はない。明日は今日と同じように太陽がのぼり、そして一日の労働があり、太陽が沈むだろう。ところが、死者はその秩序を壊し、これまでと異なる明日を迎えなければならなくなる。循環は壊され、未来は不定形となる。欠落としての死者、取り返し得ない過去を抱えて、不安な流動化した未来を迎えなければならない。それを安定化させ、日常的な循環の中に引き戻していくことが課題となる。

ところで、死はそれと対極に誕生を際立たせる。明日が昨日までと異なるとすれば、死者だけでなく、新しく迎え入れた新生者もまた、その相違を作る。死者が取り返し得ない過去を作るとすれば、新生者は流動する未来に新しい秩序をもたらす可能性を帯びている。死者の取り返し不可能性と時間の断絶に比べ、新生者はむしろ循環する時間をパワーアップして継続させていく力をもっている。

ここに、過去と異なる未来の問題が生まれる。

(末木文美士『冥頭の哲学Ⅰ 死者と菩薩の倫理学』より)

【注】 *「冥」

人間の理性的把握を超えた他者の領域のこと。

*「顕」

人間存在の属する、合理性によって解明される領域のこと。

*アラタマ

荒々しく勇ましい神霊。

*ニギタマ

静かで穏やかな親しむべき神霊。

*上原専祿

昭和時代の歴史学者、思想家（一八九九～一九七五年）。

*菩薩

本文では、幸福をもたらすべく死を超えて自覚的に他者に配慮し、関わりとうとする存在のこと。

*田辺元

大正・昭和時代の哲学者（一八八五～一九六二年）。

*「歴史の記憶」論争

フランスの社会学者モーリス・アルヴァックス（一八七七～一九四五年）以来の、集団の共通認識としての記憶と、歴史の関係についての論争のこと。

問一 筆者が死者について傍線部1A「循環の中に位置づけられる」としながら、傍線部1B「死者は循環もせず」と述べるのはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 死者が循環する時間の中にあると言いきってしまつてよいのかどうか、筆者自身にまだためらいがあるから。

イ 一人の死は無数に反復される人の生死の一つにすぎないが、その周囲の人にはそのように感じられないから。

ウ 人間の死というものを客観的にとらえられる人と、筆者も含めてそれができない人に分かれるであろうから。

エ 人の死はずつと繰り返されてきたことだが、それでも多くの人にとって自己の死は受け入れがたいことだから。

オ 人間の共同体の中で時間は循環し続けているが、死者はもはやその輪の中に入っていくことができないから。

問二 傍線部2「死者はその根源において過去性によって刻印されている」とあるが、死者の過去性とはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 死者は現在とつながり、時間の流れを乱して現在に介入してくるようだが、結局は過去の存在でしかないということ。
- イ 死者は現在も記憶されているとはいえず、その記憶が過去にかかわった人に限られている事実は動かないということ。
- ウ 死者は過去の存在であるばかりか、日常の連続を断ち、過去は動かせないという認識を突きつける存在だということ。
- エ 死によってその人の時間の流れは止まることになり、他の人々にとっては過去の存在でしかなくなるということ。
- オ 死者は時間の流れを重層化させ、現在に影響を及ぼすことで、過去を未来よりも重要だと思わせる存在だということ。

問三 空欄

X

に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 斧おの

イ 釘くぎ

ウ 楔くまひ

エ 鉈た

オ 鉞せき

問四 傍線部3「逆説的」とあるが、この文脈において逆説的であるとはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 前の段落では時間の循環を説いているが、ここでは時間の循環が止まるという相矛盾する内容を述べるとのこと。
- イ 前の段落で死者によって時間が成り立たなくなると述べながら、ここで再び時間の問題について論じるということ。
- ウ 意図的に読者の意表を突く極端な表現を用いて、これまでに論じてきた時間の問題を逆の面から捉えるということ。
- エ 過去というものを時間の流れの中において考えるあたりまえの認識に、あえて反するような表現をとるとのこと。
- オ 過去は時間の流れの中にないという言いまわしで、実は時間の流れの中にあるという事実を意識させるとのこと。

問五 傍線部4「脳死は死かという議論は、医学的、法律的にはあり得ても、本来的には無意味な議論であり」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 死というものは一連のゆるやかな推移であって、脳死か身体の死かでその瞬間を特定することは重要でないから。
- イ 脳死の問題は現代の医学が発見したもので、法的な手続きには影響しても実質的な人間の死とは言えないから。
- ウ 脳死が死かどうかという問題は死の法的認定に関与する人々を除いて、多くの人にとっては無縁のものだから。
- エ 人の死が繰り返り返し、連続していく中で、一人が脳死で死と判定されるかどうかは比較的小さな問題であるから。
- オ 多くの人の場合、死は一定の年齢の幅のなかで訪れるものであり、脳死状態となるかどうかに関わりはないから。

問六 傍線部5「死者は別の形で生者とかがわり続ける」とはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 死者の記憶は薄れても、それが災いをもたらしたり、恩恵を与えたりと姿を変えながら生者に関与するということ。
- イ 死者のうちでもとりわけ戦死者の記憶は消滅することなく、辛い現実として長く鮮明に記憶され続けるということ。
- ウ 直接知る者がいなくなった死者たちが、生者に対して間接的な記憶を蘇らせるように態度の変容を促すということ。
- エ 死者たちが積み重なって生者にとっては個々の人の記憶が薄らいでも、死者の側からの働きかけは続くということ。
- オ 記憶としては失われた過去の死者たちの記録で歴史が形作られ、生者たちに現在を考えるよすがを与えるということ。

問七 本文中で、死者と新生者はそれぞれ未来とどのように関わると述べられているか。四十字以上、五十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

なきと聞けば、ありといはまほしく、あしきと言ふをば、よきと事かへて言はんこそ、いとねぢけたることなれ。

桜てふ花は、わが国のものなるを、唐国にもありとて、さまざまためしなど引きつくれど、桜描いたる唐土の画もなく、かなへりと思ふ唐歌もなければ、なしとこそ言ふべけれ。いでや、桜と言はでしも、花とだに言へば、異木にはまぎれぬものを。「ほのほのと明け行く山際、雲か雪かとはかり咲き満ちたるも、霞こめたる夕間暮れ、花の気配もおほろにみえて、ここにのみ暮れ残す景色」など言ふは浅かりけり。まいて、「うてなのびやかなれば、近劣りする」など言ふは、かのことかへて才おふ心に言ふことなりかし。風に散りかふも、雨に濡るるも、遠山に見るも、軒端に向かふも、曙も、夕暮れも、露の干る間も、目離るる時しなきを、ことに我が国ぶりの姿にて、枝もすなほに、花の形もゆたけく、匂ひさへもこちたからぬも、あやしきまでにこそおほゆるものなれ。

さるを、いづこにもありと言ふはさらなり、曙、夕暮れなどと、面白からんやうに言葉添ゆるは、いまだ深くそめし心にはあらざりけり。すべて、言葉もて言ひ尽くさんと思ふは、いと浅き心かな。

（松平定信『花月草紙』より）

【注】 * 唐歌 * 漢詩。

* うてな 花の萼。

問一 波線部①「いはまほしく」②「ねぢけたること」③「こちたからぬ」の本文中の意味として、最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

① 「いはまほしく」

ア 言つてほしいと思ひ イ 言うものであり ウ 言いたがり

エ 必ず言ひ オ 言うことがあり

② 「ねぢけたること」

ア 不都合なこと イ ひねくれていること ウ 誤っていること

エ かたくなであること オ 考え足らずなこと

③ 「こちたからぬ」

ア 仰々しくない イ 並一通りではない ウ 悪くない

エ 独特ではない オ 卑しくない

問二 二重傍線部 a「たる」b「るる」c「し」d「から」の文法的説明として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 名詞 イ 動詞 ウ 動詞の一部 エ 形容詞 オ 形容詞の一部

カ 形容動詞 キ 形容動詞の一部 ク 助詞 ケ 助動詞 コ 助動詞の一部

サ 動詞の一部と助動詞

問三 傍線部「桜と言はでしも、花とだに言へば、異木にはまぎれぬものを」を現代語訳して、解答欄に記せ。

問四 傍線部2「浅かりけり」とあるが、筆者がそう考える理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 桜は盛りするときこそ美しいという考えは、花の散るさまを愛でる日本の伝統的な美意識を理解していないことを示しているから。

イ 桜の美しさは周囲の環境で変わるという意見は、花の様態で美醜を決める日本古来の伝統を理解していないことを示しているから。

ウ 桜が咲く状況だけを称える和歌は、どこで咲こうと日本の桜は変わらず美しいという考えを理解していないことを示しているから。

エ 趣のありそうな表現で桜を美しく形容しようとするのは、この花のすばらしさを本当には理解していないことを示しているから。

オ 和歌の美的表現だけに固執する主張は、漢詩にもすばらしい表現があるという事実を理解していないことを示しているから。

問五 傍線部3「才おふ心」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア わざと誤ったことを言うことで、自分の才能を隠しておこうとする気持ち。

イ 必死に自分の知識をひけらかして、他の人の意見を論破しようとする気持ち。

ウ なんとかその場にふさわしいことを言おうとして、気負ってしまいう気持ち。

エ 変わった着眼点を示すことで、自分の知性を高く見せようとする気持ち。

オ 唐国の花の欠点を指摘し、日本の美のすばらしさを誇示しようとする気持ち。

問六 本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア とりわけ日本の桜が美しいのは、あらゆる風景に似合うからである。

イ 桜はどんな状況で見ても、どれも不思議と心を打つものである。

ウ 日本には、桜の美しさを判断する基準のようなものがある。

エ ござかしい表現で桜を讚える者は、唐国に桜がないと主張しがちである。

オ 日本人の桜への愛情は、詩歌や絵画といった芸術の中で培われてきた。

問七 『花月草紙』と同じく江戸時代に成立した作品をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 風姿花伝

イ 平中物語

ウ 方丈記

エ 古事記伝

オ 十六夜日記

